



ちょうかい・れんし

1999年2月2日長崎県生まれ。先天性の上下肢障害により義足で生活。中学1年で車椅子バスケットボールを始める。佐世保車椅子バスケットボールクラブ所属。高校1年生で、第12回北九州チャンピオンズカップ国際車椅子バスケットボール大会日本代表に選出。2016年9月のリオデジャネイロ・パラリンピック大会に向けた合宿・遠征等にも参加している。現在、長崎県立大崎高等学校2年生。

「車椅子バスケットボールを中学1年で始め、高校1年の特に、華麗なチエアスキル（車椅子操作の技術）やスピード感が買われ、日本代表に抜擢されましたね。鳥海選手は守備が得意なことですが、この競技の魅力とはど

ういところだと思いませんか？
鳥海 観戦でいうと、車椅子同士の激しいぶつかり合いがほかのスポートにはなく、おもしろいと思います。プレーする側からすると、健常バスケットと変わらないぐらい緻密に戦術を立てていたり、インテリジェンスな部分を使いながらプレーしたりするところが魅力です。実際には車椅子の幅を計算して動くチエアスキルや、相手を交わすクロスオーバーなども健常者のものとは違い、競技の奥深さを感じています。
「車椅子ならではの新たなスポーツのおもしろさがあるんですね。」
鳥海 はい、そうですね。「車椅子競技」と一括りにされることも多いけれど、どの競技も一つのスポーツとして興味を持ってほしいです。できれば広く健常者の方にもプレーしてもらい、その魅力を知ってほしいと思います。
「観ていると、激しい動きの連続

で、相当体力と腕の力が必要なんだろうなと思います。でも、いつか体験してみたいですね。
鳥海 守備では、これも車椅子特有なんですけど、バックピックといって、相手のシュートが入った後、すぐに自陣に戻ろうとする選手を止めようとする戦術や、相手のキーマンになるような大きい選手をフロントコートに行かせないようなプレーなど、チーム全体で守っていくところが魅力ですね。
「絶対に負けたくない」
その気持ちが強さの秘訣
「プレーの際や、日々の生活のなかで大事にしていることはありますか？」
鳥海 もともと負けず嫌いな性格なんですけど、自分が出ている試合で自分より速い選手がいたりうまい選手がいたりすると、その選手と同じプレーをしたりして、すごくやり返したくなるんです。そういう思いを持ち続けることが大切なんじゃ

◆ 巻頭インタビュー

長崎から世界の舞台へ 高校生アスリートの挑戦

車椅子バスケットボール選手／佐世保 WBC 所属
鳥海 連志 さん



障がい者スポーツに見るフェアプレーの本質

2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、障がい者スポーツへの関心が高まっている。学校教育現場での理解促進プログラムや、企業の支援も活発化してきた。本特集では、障がい者スポーツを多様な角度から知り、さらには、障がい者スポーツの理解促進の先にある、我々が目指す社会のあり方について思いを馳せる機会としたい。



JWBF/フォトサービス・ワン

ないかなと思っっています。

自分にはとてもできないという弱気な心でいてはダメだし、自分はまだ若いから先輩たちに譲ってプレーをするというのもダメだと思う。物怖じしないプレーを心がけています。

日々の生活では、食事については、一時期たくさん食べようとはしたこともあるけれど、なかなか食べられなくて…。就寝時間もあまり決まっていないですね。

あと、NBA（全米プロバスケットボールリーグ）などの動画を毎日見るようにしています。単に自分がプレーするだけでなく、ほかの選手がどんな動きをしているか、外から見るといえるものが見える気がします。

―普段はどんなトレーニングに励んでいますか？

鳥海 車椅子バスケットボール日本代表のヘッドコーチの及川晋平さんと連絡を取りながら、この1カ月間、筋トレを毎日やっています。それほどきつくはないのですが、継続

してやるのが大切だということ。バスケットボール自体は体育館の使用許可の都合で毎日ではないけれど、チーム練習がない日は、なるべく個人練習の時間をとるようにしています。

自分に限界をつくらない

―激しい転倒やけががつきもので、運動量からいってもとてもハードなスポーツだと思いますが、やめたいと思ったことや、挫折感を味わったことはありませんでしたか？

鳥海 自分の人生のなかで、車椅子バスケットボールは自分が唯一打ち込んでこられたことなので、これまでそういう気持ちになつたことはありませんね。もともと運動するのが好きだったせいとか、親は昔から自分がやるうとしていたことに対して何でも「やってみなさい」と言ってくれました。心配しながらも自分が「やる」と言えば、危険なことでもやらせてくれたので、それが今にかざれている感じです。

ポットをあててもらえとうれしいです。

リオ、そして東京への思い

―2016年のリオ・パラリンピック競技大会、2020年の東京・パラリンピック競技大会に向けての目標をお聞かせください。

鳥海 まずは日本代表チーム12人のなかに残ってリオの舞台に立つことです。勝負わず、しっかりと自分の普段通りのプレーをすれば実現できると考えています。また一番の課題は、シュートの精度を上げること。東京パラリンピックに対しては、先が長いようで短いので、今あるたくさん課題を少しずつ克服して、世界的にグレートなプレーヤーになって出場したいです。海外の選手は一つひとつのプレーにおいて質と個々の能力が高いため、国内では通用するプレーでも海外だと通用しない場合があります。やはりレベルの差があると考えています。

―やはり世界の壁は厚いんですね。それだけにベストを尽くして、できればメダルも狙いたいですよね。

鳥海 チーム全体での目標があります。その目標に向かって戦略を練っているところです。僕個人としても、出場するからには全力で、メダルを獲得するつもりで戦いたいと思っています。

―車椅子バスケットボール競技界の若手のホープと呼ばれていることについては、どう思われますか？

鳥海 自分に期待してもらえるのはすごくありがたいし、多くの方がいるいるなアドバイスをくれるので、プレッシャーというより、少しでもよいプレーをして結果を残したい、気持ちに伝えたいという思いが強まっています。

以前は、試合に出ても客席で見ると人はまばらでしたが、これまでに比べて観客が増えたと感じます。たくさんの方の応援、声援があるとほんとうにうれしく思います。

―ご両親の関わり方は、これまでの鳥海選手の人生に大きく影響していますね。障がい者スポーツ、パラリンピック競技について鳥海選手が多くなの人に一番知ってほしいこと、伝えたいことは何でしょうか？

鳥海 障がい者は身体が不自由で、健常者の方に比べたらできることが少ない、というイメージを持っている方も多いと思いますが、障がい者にはそれぞれに固有の障がいがあり、その内容も程度も違っていることを知ってもらえたらいいですね。

車椅子バスケットボールの場合、コートには12人いますが（※1）、12人が異なる障がいを持っています。できること、できないこと、気を遣ってほしい部分、そうではない部分それぞれに異なるため、これを「障がい者」という一括りにするのはなく、一人ひとりの違いを認めてほしいな、と思います。

競技においては、そのいろいろなカラーの選手たちが、一つのシチュエーションにいくまでの過程で、本当に緻密な戦術や戦略を練ってプレーしているので、できればその過程にもス



鳥海選手の義足

―鳥海選手は根っからの負けん気の強さとチームに貢献しようとする思いで、ここまでがんばってきたんですね。

鳥海 バスケットボールはコートに立つ選手それぞれの個性が問われる奥深いスポーツだと思っています。チームの連携のなかでシュートが生まれることもあるし、試合中のコミュニケーションだけでも質が高まるので、そういう部分も意識していきたいながら成長していきたいですね。ディフェンス（守備）でもオフェンス（攻撃）でも試合中にトークができるチームは本当に強く、それもこれからの課題です。



JWBF/フォトサービス・ワン

「スポーツとコミュニケーションは切っても切り離せないものなのでね。」

鳥海 ヘッドコーチの指示を理解しすぐに実行できること。プラス、コートの中で5人が話し合っつてすぐに修正をかけられる、そんな試合運びができるチームが理想だと思います。

環境整備への提言

「一人ひとりの個の確立のうえでの協働ですね。日本における、障がい者ス

ポーツをとりまく環境が、将来どのようなようになってほしいと考えますか？」

鳥海 車椅子の転倒やブレイキ痕などで、体育館に傷がつくから、と使用できない会場もあります。試合をする体育館もだんだんバリアフリー化されてきているけれど、体育館の近くのホテルがバリアフリーなのか、体育館が普段の利用者のためだけでなく競技用になっているかなどを見ていくと、まだまだ整った環境のところは多くありません。その問題が解決されれば、選手やスタッフ、一般社団法人日本車椅子バスケットボール連盟の方々も、競技自体やりやすいし、競技だけに集中できるのかなと思っています。

「地域全体の環境整備が進めば、おのずと一般人の意識も変わりますからね。」

鳥海 日本代表の場合でも、全国各地で地元の方々にご協力いただいでケットボールをより多くの方に知っていただけるよい機会だと思っています。

ます。

同時に、やはりしっかりと安定した自分たちの拠点を持ちたいという願望もあります。連盟の方々も選手にストレスがない環境をつくらうとしているので、改善が期待されます。アメリカでは車椅子バスケットボールはとても人気で、地域にいるるなチームがあつて、使用できる体育館も多く、すばらしい環境が整っています。

「海外に出ることは、そういう意味でも大事ですね。ぜひ、選手の方々の声を、どんどん出してください。最後に、将来の目標について聞かせてください。」

鳥海 将来的にはプロリーグに進みたいと思っていますが、まだ日本にはありませんので欧州のプロリーグに進む道を考えています。ですが、まずはリオの選考に残ってスタメンで出場し、東京パラリンピックの後もまだ年齢的に出られるので、しっかりと成長を止めずに、世界的に有名なプレーヤーになることが目標です。

「リオの舞台で好プレーを見せてくれることを期待するとともに、これからも楽しみながら、さらなる高みを目指してほしいです。応援しています。今日は貴重なお話をいただき、ありがとうございました。」

【取材を終えて】

鳥海選手は終始、こちらの質問をしっかりと受け取り、まっすぐに答えるその姿勢がとても頼もしく見えました。車椅子バスケットボールが生きていることそのものという様子が伝わってきます。

鳥海選手のような若い人たちが世界で活躍して、どんどん発信してくれることで、私たちの心のバリアフリーにつながることに必至です。競技でのメダル獲得だけでなく、違いや個性を尊重し合える社会を実現できるといふ期待が膨らんだインタビューでした。

インタビュー 高橋香歩（ライター）

【2015年12月14日 長崎県西海市の鳥海選手の自宅にて】



JWBF/フォトサービス・ワン